

一九世紀初頭北ベンガルの流通と手工業

—ブキャナン報告に基づいて—

谷 口 晋 吉

一 序言

私は、表題の地域と時代についてこれまで数本の論文を書き、在地領主制と農民支配、在村工業（洋式藍業と製糖業⁽¹⁾）等に関する基礎的研究を行った。そこで本稿においては、今まで十分に取りあげることの出来なかつた流通機構と農村手工業について、F・ブキャナンの調査報告に主に依拠しつつ考察してみたい。

ブキャナンは、東インド会社政府の依頼を受けて一八〇七—一四年にかけて、ベンガル州北部二県、ビハール州四県の現地踏査行を実施し、それぞれの県につき、歴史、地誌、住民社会、博物学、農業、商工業に関する浩

瀚な報告書を書き残した。本稿は、この内、ベンガル北部三県（ラングプル県、ディナジプル県、ブルニア県）に関する報告書を取りあげる。ところでブルニヤ県は、ベンガルとビハールの両州に跨るが、その東半分はベンガルとの関連が特に強いので、敢えて、北ベンガルに含めて考察する。註2に示す様に、ディナジプル県（以下D県とする）とブルニヤ県（P県）の報告は、一八三三年と一九二八年にほぼその全体が刊行されているが、ラングプル県（R県）のそれは、その一部が印刷されただけで、特に本稿の依拠する同報告第五篇は未公刊である。従って、この部分については、手稿本のマイクロ・フィルム^{*}によることにする⁽²⁾。

本稿の構成を示そう。まず第二節において、R県を中心としながら、北ベンガル農業社会の産業構造の概況を、若干のマクロ経済指標によりつつ提示する。第三節は、当時の流通機構について、市場地、商人、商品、流通圏などを中心に具体的に叙述する。そして、第四節で、農村手工業の具体的姿を、労働力編成、原材料の入手、経営形態、収益、市場化の方法などに注意しつつ、提示する。ただし史料に精粗があるので、いくつかの職種については、ある程度詳しく述べられるが、多くについては、簡単な素描に留まる。そして、第五節で、若干の全般的考察を行い結びとする。とにかくも、データの非常に乏しい研究対象であるので、ブキャナンの記述をまずはそのまま受容して咀嚼し、当時の北ベンガル農業社会における非農業セクターのごく大抵みなイメージを得ることに力を注いだ。今日の研究的状況にあっては、いかに初歩的ではあれ、このような作業にも一定の価値が認められよう。

本稿では、圧倒的に重要な農業セクターの内容に立ち入る分析は行わない。それは、別の独立した論文で慎重になされるべきであろう。又、紙幅が極端に不足してい

るので、ブキャナン報告に依る記述については、殆ど、註を付けえないが、ご寛容を乞いたい。

* 本稿の主要な史料の一つとなるラングブル県に関するブキャナン報告のマイクロ・フィルムは、故深沢宏教授がロンドンを訪れた折に、ご多忙の中を、旧インド省図書館から入手して下さったものである。末尾になるが、先生の長年のご指導に対し心よりの感謝を捧げ、又、ご冥福をお祈り申し上げる。

(1) 谷口晋吉「一九世紀初頭北部ベンガルの洋式藍業」『一橋論叢』八七—五、一九八二年。同、「18世紀末北部ベンガルの在来糖業」安場保吉、斉藤修編『プロト工業化期の経済と社会』一九八三年所収。

(2) ① F. Buchanan, *Account of the District or Zila of Ronggopur*, transmitted to the right honble. the Governor General in Council, 28th June 1810. (MSS—EUR—D74 & D75). ② Do., *Account of the District or Zila of Dinajpur*, Baptist Mission, Calcutta, 1833. ③ Do., *An Account of the District of Patna in 1809—10*, Bihar and Orissa Research Society, Patna, 1928. ④ 高島ヤナン報告のビハール州に関する部分の説明として、高島裕「十九世紀初期ビハール州における Rajy't の階層構

成』『北海道大学文学部紀要』十三ノ一、一九六四年、七五―七八頁。

二 北ベンガル農業社会の概況

本節では、当該地方に関する若干の基本的マクロ経済指標をブキャナン報告から推計し、本稿の課題である非農業部門が農業社会全体で占める比重について、ある程度具体的なイメージを得たい。ただし、紙幅の制約から、推計途上の様々なデータの吟味は最小限に留め、作業結果とそのいくつかの含意のみを手短かに述べよう。

最も基本的指標である県人口に関して、ブキャナンは県毎の推定を与えている。ところが、一八七二年の予備センサスと照合すると、D、P両県のブキャナンによる人口推定値は、行政区画の変更による調整を行ってみても、予備センサス値をはるかに超えており、信憑性を欠く。それに対して、R県の推定値は、一八七二―一九〇一年の人口動態に照らして判断する限り、比較的正確であると思われる。そこで、本節は、このR県のデータを中心にみてゆくことにする。

(1) 人口構成

ブキャナンは、R県の二四警察区 (Thana) について、夫々、人口密度を観察し、犁の台数と耕地面積の二つの指標を用いて、その人口を二七三・五万人とした。そして、それを、チャーサ、カワース、シュカワースの三つの構成要素に分けた。チャーサ (Chasa) は農業従事者であり、人口の七六%を占める。残る二四%は、カワース (Khasas)、シュカワース (Sukhasas) がほぼ半数ずつを占めている。カワースとは、非農業部門に従事する各種労働者、職人、商人を指し、シュカワースは、有閑階級 (地主)、聖職者、専門職 (教師、医師、弁護士など)、各種事務職 (政府役人、地主のスタッフ) を指す。ところで、インドの他地域と同様に、北ベンガルの社会も錯綜した人口構成をもつので、右の三区別だけでは十分にその構成を把握し尽せない。まず宗教をみると、R県の総人口中で、回教徒五六・二%、ヒンドゥ教徒四三・七%、その他 (Ashud) 〇・二%である。そして、ヒンドゥ教徒は更に平地部ベンガルや西部インドから移住した完全にヒンドゥ化した人々 (二二・二%) と、カ

表 1 ランゾール県非農業部門の構成

職 種	宗 教	人 数, 単 位 数	粗 産 出 額	租 付 加 価 値	職 種	宗 教	人 数, 単 位 数	粗 産 出 額	租 付 加 価 値
1. 師子子(Not & Nott)	H	78	—	2,808	35. ちくち師	H	59	?	2,478
2. 宗安製糖廠(Handy)	H & M	587	—	?	36. 製子細工	M	4	?	?
3. 宗安製糖廠(Badlyokor)	H	2,664	—	95,904	37. 陶工	H	1,094	?	52,512
4. 同 (Bajlkor)	H	7	—	?	38. 神像作り	H	81	?	?
5. 洗瓶人	H	358	—	17,184	39. レンガ作り	H(T)	25	?	3,600
6. 仕立屋	M	299	—	13,455	40. レンガ工	H	32	?	1,152
7. 床屋	H	1,396	—	67,008	41. 石灰焼き	H	477	?	22,896
8. 鹽製粉作り	M	3	?	?	42. 貴金属細工師	H	496	?	23,808
9. 顔料作り(Abhirwala)	H	36	?	?	43. 鑄造細工師	H	129	?	6,966
10. 同 (Sindur)	M	3	?	?	44. 真鍮細工師	H & M	263	?	14,202
11. 顔作り	M	1	?	?	45. 錫細工師(Birdiwala)	M	169	?	8,640
12. 髪身具作り	M	27	?	1,296	46. 金銀細工師	M(T)	1	?	?
13. 只履輪作り	H	30	?	?	47. 印章師	M	1	?	?
14. ピエツ作り	H	115	?	?	48. キセル管(Not)作り	M	4	?	240
15. 宗教教師師	H	536	?	?	49. 穀穀治豆	M	892	?	42,816
16. ヲット作り	H	238	?	5,712	50. 男物師	M	11	?	?
17. 傘作り	H	17	?	?	51. 織綿師 (Dhunar)	H T	2	?	?
18. バスケツト作り	H	1,140	?	?	52. 粉木工	H & M (numerous)	12	?	1,128
19. 製紙業	M	127	12,954	7,811	53. 染色師	M	41	5,712	2,124
20. 皮革業	H	308	?	11,088	54. 絹織工	H	21	?	?
21. フラム皮張り	H	253	?	?	55. 絹糸織工	H & M	6,755	881,640	364,680
22. 彈染作り	M	42	?	?	56. 木綿織工	H	12	?	?
23. ロツク作り	M(T)	3	?	?	57. 綿一麻混布織工	H & M	6,755	881,640	364,680
24. ヲツク作り	M	86	?	?	58. 絹カーベツト織工	H(T)	100	16,800	3,150
25. タフト作り	M	2	?	?	59. ジャエツ袋地織工	H	244	?	5,856
26. 刺タタム作り	H	405	?	?	60. 麻布(Meghli)織工	H	(60,000)	351,000	270,000
27. 刺タタム作り	H	27	?	?	61. 染染業	H(T)	8	?	?
28. 製油業者	H & M	3,254	468,576	195,240	62. 製鹽業	H	52	104,500	26,000
29. 醜農業	H & M	921	?	?	63. 製鹽業	H	78	650,000	307,590
30. 菓子職人	H	54	?	2,916	合 計		25,879	—	Rs. 1,935,286
31. 米菓子作り(Bhujari)	H	985	?	28,650	(資料) F. Buchanan, Ronggaipur, Book V. M. M. Martin, A History, Antiquities, Topography, and Statistics of Eastern India, vol. III, 1839, pp. 709—710.				
32. 豆加工	H	40	?	?					
33. 大工	H	682	?	26,644					
34. 製材工	M & H	91	—	3,822					

ムルジョー (Kamrupi) と総称される古くからのクッチ・ビハール、アッサムの住民で様々な度合でヒンドゥ化の過程にある人々(七七・八%)に分かれる。同様に、回教徒も、少数の自覚的なムスリム教徒と、大多数のカムルビーからの強制改宗者に分かれる⁽¹⁾。後者は、なお、多くのヒンドゥ的習俗を持ち続けている。本稿にとって見逃せない点は、この宗教的、人種の相違が、住民の生業構造に関係することである。一般的に言えば、平地ベンガル系住民はカースト的身分秩序とヒンドゥ的浄・不浄の觀念による職業規制に強く捉えられているが、カムルビー系、ムスリム系住民は相対的にそれから自由である。又、カムルビー系住民の中でも、ヒンドゥ化の進行の遅い人々の間には独特の自給的経済構造が強くみられる⁽²⁾。こうして、北ベンガル全域にわたって、いくつかの系統の住民が濃淡の差はあれ、拮抗しつつ混住しているのであるから、ヒンドゥ価値体系に基づくいわゆるインディ村落共同体とその生業構造が典型的に成立することは困難であった、と思われる。

(2) 生業構造

前項でみた様に、R県の人口の七六%は農業に従事している。だが、農民内部の階層構成に関する数量的データが筆者の入手した複写フィルムには欠けているので、ここでは、本稿の中心課題をなす非農業部門の生業構造のみを検討する。ブキヤナンは、この県の手工業を六三業種に分けるが、それは更に五種に大別され、芸能人三、三三六組⁽³⁾、非耐久日常消費財職人一〇、六七六名、耐久消費財職人四、五〇二名、織工七、一八八名、工場製造業一二〇となる。なお、織工数には、数十万人にのぼる女性の紡績労働者や、カムルビー系の女性に特有の家用織布労働者(八一、六〇〇名)は含まれていない。そ

表2 R県農業粗産出額

	Rs.	
果樹	181,450	
竹	154,125	
野菜	515,220	
米	9,311,457	
豆(China. Kangni)	213,357	
小麦・大麦	108,465	
豆(Pulses)	217,144	
油性種子	1,069,009	
甘蔗	444,946	
Jute その他	225,611	
棉花	3,835	
ベテルの葉	179,700	
ベテルの実	469,375	
タバコ	253,280	
阿片	66,250	
藍	127,260	
桑 その他	135,930	
合計	13,676,414	

(資料) M. Martin, *Eastern India*, p. 711.

(註) ここで貨幣単位を示す。

1 Rupee=16 Annas

1 Anna=20 Gandas

又, 1 Rupee=180grain troy of silver

表3 R 県粗産出額 (推定)

農業		Rs. 13,676, 414
非農業		
芸能	(Nos. 1 to 4)	98, 712
非耐久消費財・サービス業	(Nos. 5 to 32)	663, 566
耐久消費財	(Nos. 33 to 50)	211, 776
織物業	(Nos. 51 to 61)	1, 650, 736
製糖業	(No. 62)	104, 500
製藍業	(No. 63)	650, 000
合計		17, 055, 704

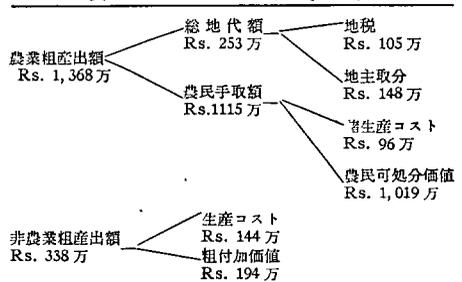
(資料) 表1&2に同じ。

(註記)①芸能のように、粗産出額の不明な部分は、判明している粗付加価値額をもってかえた。
従って、過少評価気味であろう。
②言うまでもなく、自給用部分も、市価で評価して算定しているが、このように、大雑把な推定であれば、問題は生じないだろう。

一般的にいえば大半の業種は、域内市場向けの零細家族経営であり、その業種構成の基本枠組みは、ヒンドゥック的職業構成を踏襲している。だが、そこにはムスリムだけの新たな業種が組み込まれ、更に、ヒンドゥック職業体系の中で位置付けられた職種であっても、それを実際に行う職人は、本来それを行うべきカースト・ヒンドゥックのみでなく、カムルビー系住民やムスリム系住民が大幅に参入してい

れぞれの区分内のより詳しい業種、人数、生産額などの推定作業の結果は、表1に与えられている。この内、重要ないくつかの職種について、第三節で具体的に述べるが、全

表4 R 県粗付加価値 (推定)



(資料) 表1, 2, 3より。

収入は入っていない。この表3より、R県の粗産出額の八〇・二%が農業から、そして、一九・八%が手工業・サービス業から生じていることが読みとれる。織物業が農業に次ぐ大きな産出高をあげており、又、洋式藍業も無視しえない重要性をもつことが理解されよう。

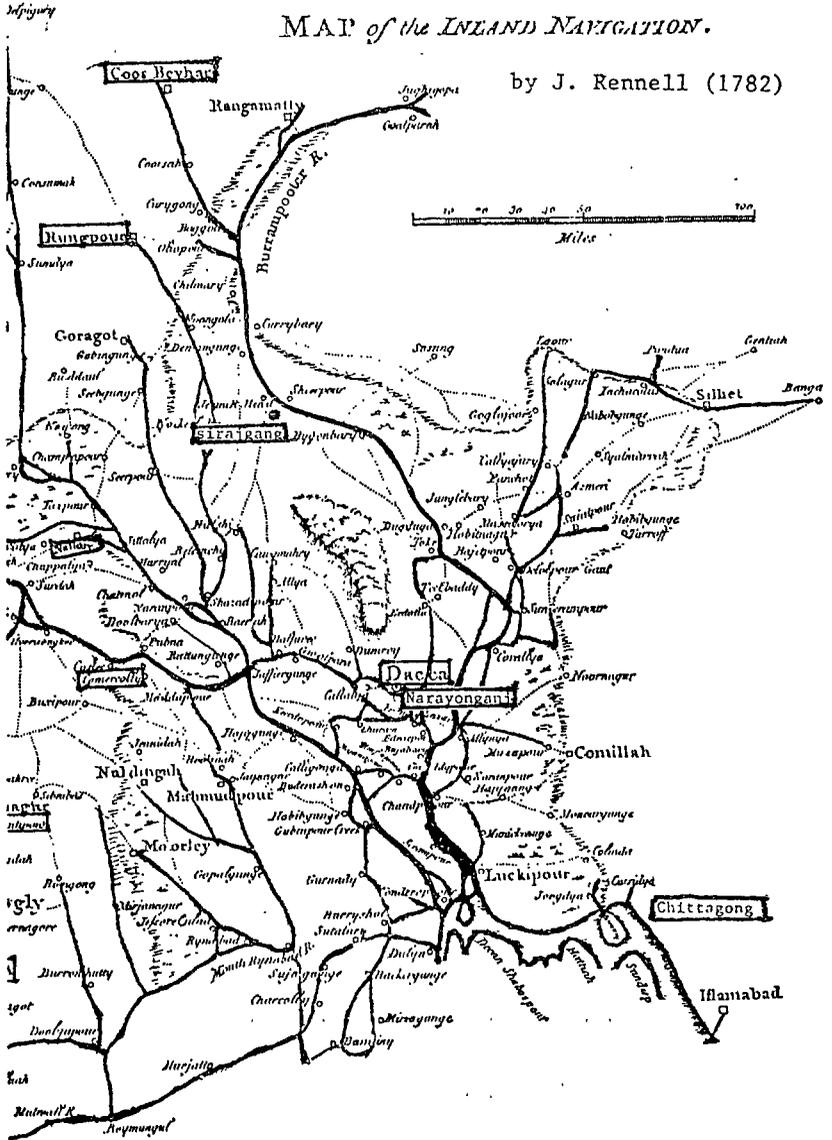
(4) 所得分配構造

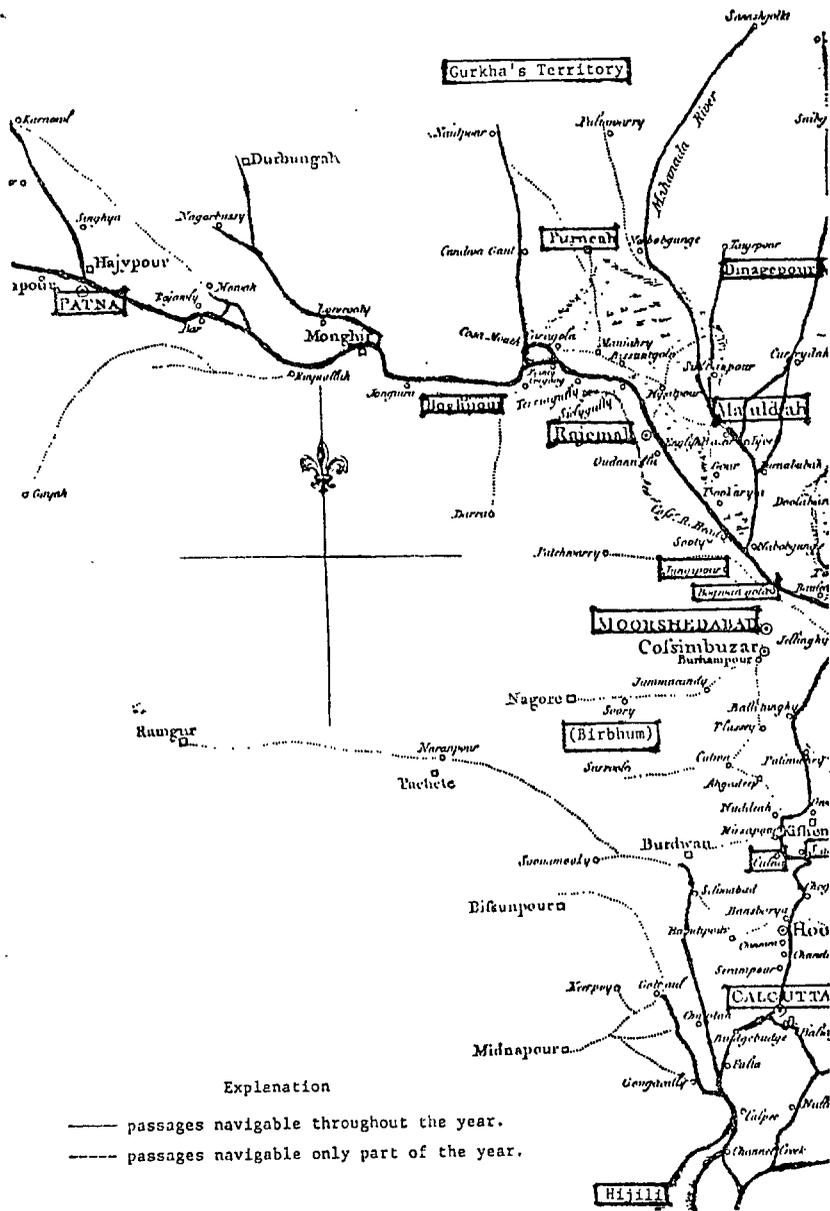
前項の粗産出額よりコストを減じて、各部門の粗付加価値を推定し、更に、農業については、その帰属の状

るのが実情であった。(3) 部門別粗産出額 表1より手工業部門の粗産出額を、そして、表2より農業部門のそれを計算して総合すると表3を得る。ただし、ここにはデータを欠く為に流通より発生する

MAP of the INLAND NAVIGATION.

by J. Rennell (1782)





Explanation

- passages navigable throughout the year.
- - - passages navigable only part of the year.

況をみてみよう。この為には多くの予備的作業が必要とされるが、それに立ち入る余裕はない。細部の手続きは省くがブキャナンの三県の報告書の各所のデータ及びかつての私自身の研究の成果を援用して、この推計を行ない表3と表4とを得たことを記しておく。ここから、R県の粗生産(粗付加価値)の分配状況は、政府七・二%、地主一〇・一%、農民六九・五%、サービス・手工業者一三・二%となる。同表は、これと同時に、農業粗生産額中の地代、地税の比重をも示していることに、注意されたい。

(5) 輸出・入

最後に、対象三県の輸出・入統計をみておこう。ここで、輸出・入とは、県外との物資交換を意味し、外国との貿易は必ずしも意味しない。表5にみられる様に、三県とも大幅な出超を記録しており、その原動力が米輸出であることが、注意すべき点である。

(1) W. W. Hunter, *A Statistical Account of Bengal*,

vol. VII, 1876, London, p. 221.

(2) F. Buchanan, *Ronggopur*, Book V, p. 58.

(3) これらの数字は、職人数、家族数、工場数、チーム数、機台数などを示し、単位のとり方は様々である。

三 流通機構

(1) 市場 (Gani, Bandar, Hat, Bazar) とその発達度
北ベンガルの物資流通は、主要河川沿いに点在する地方商業センター (Gani, Bandar) と、その後背の多数の村市場 (Hat, Bazar) を通して行われる。前者は、地域社会と域外市場の結節点をなし、しばしば都市の様相を呈し、常設店 (Dokan)、『宿泊施設 (Sodabroto, Modiwala)』、『歓楽施設 (Houses of Bad Fame) など』、『卸売業者 (Mahajan, Paikar) の倉庫 (Gola) や住居が立ち並ぶ。兩期には多数の商船がその港に繋留し、忙しく物資の積み降しがなされる。ブキャナンの統計によれば、年間にR県を訪れる商船は大小合わせて四、一〇六隻、その他に、域内の商船が一九七隻ある。又、時には、商業センターは特産物の集荷地以外の何物でもなく、単に輸出業者の倉庫と住居が存在するだけという場合もある。表6は、平均的な商業センターの実例を示している。

表6 R 県地方的商業センターの2~3の実例

	事例1(Boda)	事例2(Boda)	事例3(Durwani)
定市	毎日	毎日	毎日
週市	2日	2日	2日
Mudi	(R) 1	3	2
Bhujari	(R) 7	4	
Sweetmeats	(R) (R)		
Ganja	(R)	1	
Distiller	(R) 1	1	1
Bad Fame	5	10	3
Sackcloth	(W) 12		
Grain Merchant	(W) 5	13	5
Shoes	(R) 7		5
Salt	?	4	
Goldsmith	(R) 1		
Brass smith	(R) 8		
Preparer of Tobacco	(R)	1	
Paikar	(W)	7	4
Potters ware	(R)	1	
Betel leaf and nut	(R)	1	
Potdar (Money changer)	(R)		1
Posari	(R)		2

(資料) Buchanan, *Ronggopur*, Index to Map.

(註記) 店名に対応する商品については、表7をみられたい。R は小売商、W は卸売商。

村市場は、商業センターと小船、牛車、荷牛、荷馬、徒歩などで結ばれており、何よりもまず、数ヶ村程度の小地域社会の農民、漁師、猟師、職人などが各自の生産

物を持ちより換金し、或いは、自己の家計が必要とする物資を入手する場である。そこは、通常、野天の広場で、週の定められた日に週市 (Bazar) が立ち、近郊住民や商人、仕入商人などが謂集し域内・外の物資が交換される。ブキャナンの指摘する如く、取引物資の大半は域内で生産され消費されるものであったろう。

R 県に関するデータを整理すると、県内に五二〇ヶ所の市場地があり、その内の一三%においては毎日開かれる定設市 (Bazar) があり、定設店が並ぶ。そして、こゝでも、週二日の週市がたつ。この種の市場地が、先述の地方商業センターの役割を果していたと思われる。次いで、定設市はなく、二回の週市のみが開かれる市場地があり、これが全体の八三%を占める。そして、残る四%の市場地は、週一回だけ週市がたつ。上の第二のタイプが、一般の村市場であることに疑問の余地はない。ところで、ムガル期のベンガルの領主は領内の市場地で市場税 (Sair) を売手から徴収していたが、一七八八年に総督コーンウォリス (Cornwallis) によりその徴収が禁じられ、領主 (後の地主) はその補償として、政府の地租の一部を控除された。同時に、市場の管理は、各

タナの警察官 (Police Darogha) の采配下におかれ、公正な取引が保証されることになった。しかし、実際は、多数の市場を少数の警察官が管理することは不可能であり、地主による市場税の徴収や、更には、地主が、特定商人に商品取引の独占を許すことなどが続き、住民の不満が高かった。しかし、ブキャナンの進言にも拘らず、このような商取引に対する地主の介入は、その後も続いた。さて、これらの市場地は県内にどの様な密度で存在したのか。ブキャナンは県内の市場地数を、D県三四六、R県五二〇、P県四八二としていたので、一市場地あたりの平均面積は、一五・五平方マイル、一四・二平方マイル、一三・二平方マイルとなる。きわめて大雑把に言うことが許されるなら、半径二マイル強の円周内に平均一個の市場が存在することになる。今日でも、この地方の農民がしばしば二マイル内外の距離を歩いて、近隣の市場に行くことを考えれば、当時、既に非常に発達した流通ネット・ワークが存在したと言つてよいだろう。

(2) 商人と商品

各市場地には、域内・外の多種多様な生産物が集荷し、

又、分散していく。前節(5)に示した様に、域外貿易において北部三県はいずれも大幅な出超を記録している。R県では、域外への商品輸出総額は、この県の粗産出額の実に二一・四%に達している。我々の予想以上に北ベンガルの農業社会は域外市場と結合しており、遠隔地との流通に携る商人の地域経済における比重は無視しえない大きさであったといつてよい。

そこで、まず、この様な域外との流通を担う商人たちから、みてゆくことにしよう。

(i) 大商人 (Sayodagur) この呼称にふさわしい商人はごく少数であり、又、そのほぼ全員が域外の大商業センターに本拠地を持つ非ベンガル系の県外人である。彼等は、一〇万ルピーを超すほどの年間取引額をもち、自己の商船群を有し、手代をこれら三県の主要商業都市に置き、大量の米などを買付けカルカッタ、ムルシダバードなどに運ぶ。著名な者は、タクルダース・ナンディ (カルカッタ近郊カルナ)、ケンギヤ (ベナレス)、ボージラージ (パトナ)、ゴサイン (西インド)。(ii) 商人長者 (Mahajan) 中位の資金量 (二千〜二万五千ルピー) を有し各地の地方商業センターを中心に商業を行う

が、更に、少くとも三つのタイプに分かれる。第一のタイプは、商業センターに倉庫を構え、域内で産する米、食用油、砂糖、タバコ、織布などを送り出し、逆に、塩、綿綿、鉄、香料などを域内に供給する。倉庫をもつので蔵元 (Golatar) と呼ばれたり、米を主に扱うので穀穀長者 (Bhusi Mahajan) と呼ばれたりする。自分の商船を持たない者も多く、その場合は、備船して商品運ぶ。

この様な中級商人は多数あり、その多くは、サハ (Shah)、テリー (Teli) などの平地ベンガル出身の商業、職人カースト員である。第二のタイプは、域外の大商業センターを拠点とする中級商人たちで、彼等は雨期に商船を立てて一斉に北ベンガル各地の商業センターに向い、仕入れた商品を現地商人に卸売りし、帰り荷として域内産品を積み返る。彼等は、船で往來し県内には一時滞在するだけなので、他処商人、他処長者 (Beru Bepari, Upari or Beru Mahajan) と呼ばれたり渡來長者 (Bhasaniya Mahajan) と呼ばれる。このタイプの商人が最も多数來訪するのはR県で、この県の輸出・入の大半は彼等の手中にあると言われる。彼等は、マイマンシン県シラジ港、^{ダッカ}近郊のナラヤン港^{ダッカ}を拠点とし、塩、鉄、

現金、為替手形を持ってR県に向い、現地商人との間で商品の等価交換を行い、又、市場から持船が満載になるまで現金で米、タバコ、油、砂糖を買付け、戻ってゆく。P県にもこの種の商人は少くない。彼等は、ラージマハ

ル、ジャンギブル、ムルシダバード、ナトールなどを拠点にし、塩、鉄、ベテルの実を、大量に持ち込み売り捌き、逆に、大量の米を現金で買付け持ち返る。更に、大河川の流路に恵まれないD県にも、ナラヤン港^{ダッカ}を拠点とする他処商人が渡來し、塩、ココナツ、ベテルの実を持ち込み、砂糖、糖蜜、タバコなどを持ち返る。第三のタイプは、特定商品の輸出・入を行う商人で、R県の葉種問屋 (Posari)、西部インド、北インドの絹織物商人 (Gosain, Goswami)、ナトールの貝問屋、サンティール、ムルシダバードの織物問屋など。又、D、P両県の製糖業者、D、R、P三県の洋式藍業者も、その域外との取引量からいえば、商人長者に入れてよい存在である。(iii) 為替商 (Kuthiwala, Saraf) 遠隔地への送金・支払手段として為替手形を發行する為替商は、北ベンガルの地域社会と域外市場を結ぶもう一つの重要な回路である。彼等は又、両替、短期融資、手形割引などにも応じ

る。このような為替商はD県七店、R県五店、P県七店あるが、中でも、ジャガート・セト (Jagat Seths) 商会は、三県の全てに支店を持つだけでなく、インドの全地域に向けて手形発行をする実力をもつ。他の商会は、バトナ、ベナレス、ムルシダバード、ダッカ、カルカッタなど、北ベンガルと深い結びつきをもつ大商業センターに対してのみ手形を振出す。その多くは、オスワル (Oswal) など北西インドの商業カーストの者である。手形割引を行うのは、ジャガート・セトを含めて三店のみで、他の一六行はこれを行わない。手形手数料は、R市を起点とすると、カルカッタ二%、ベナレス四%、D市からだと、ムルシダバード〇・五〜一・〇%、カルカッタ一〜一・五%などである。これらの商会の多くは、かつて、政府や地主の地稅送金の代行をしたり、地主や会社商館に資金貸付をし、又、混乱した旧幣制時代には両替差益によって、大きな利益をあげていた。しかし、ブキャナンの調査時には、いくつかの大商會を除くと、彼等は地主の行うべき農民からの地代徴収と政府への地稅納入を代行し、地所經營の諸勘定を行い、遠方の大都市に住む地主に剰余金を送金することなどに業務の中心

を移しており、その中で、地稅の立替払いなどの融資も行った。こうして、彼等は地主の地代収入の少なからぬ部分を、手数料や利子として得ていた。

以下においては、地域内の物資流通を担う在地商人たちについて見てゆくことにしたい。

上述の如く、商人長者が域外から持ち込む物資を商業センターで卸買する商人がおり、彼等はD県では輸入品扱い商 (Andawala) と呼ばれ、そこに店舗を持ち、五百ルピーほどの資金で營業する。彼の仕入れた商品は、中間問屋 (Paikar)、小売店主 (Dokandar)、そして原材料であれば製造業者などに卸売られ、拡散していく。R、P両県には、別個の存在としての輸入品扱い商はいず、中間問屋がその機能を兼ねた。これら中間問屋は、百〜五百ルピーの資金と小倉庫を商業センターに持ち、域外商品の県内への浸透を媒介し、他方で、域内産品の県外への輸出を仲介した。彼等は、時に、大商人などから、一定の商品の買付けを依頼され、前渡金を受け取りそれを生産者に配布した。この時しばしば生産者が契約通り生産物を引渡すことに対する保証人となった。中間

問屋はこのような仲買いをする時には手数料五〜六・二五%を得、又、保証人となった時には更に1%の料金を得た。

ところで、中間問屋は、店、倉庫を構えており、後背の農村の奥深くまで買付に入り込むことが仲々出来ないので、特に米の買付けにおいては、この役目を果す一群の小仲買人 (Bepari) がいた。彼等は多くの場合単作地帯の裕福な農民達であり、冬場米の収穫後、荷牛を連れ村々を回り、特に農作業に追われる二毛作地帯の農民から米を買付け、商業センターに運び、いずれかの中間問屋にそれを売却した。特に、良質米で有名なD県では、資金のある小仲買商は冬場米の刈入れ直前の端境期 (11〜12月) に農民に前渡金を与えて有利な買付を行った。前渡金に対して、小仲買商は一月に付き三%強の利子を課し、更に、売却代金の五%を謝礼として要求した。農民の米の引渡し価格は、その時点の市価が採用されるが、前渡金を与えた者は、右の如き利得を得た。時に、彼等は、買付けた米を退蔵し、値上がりを待って売却し、より大きな利益を得た。なお、前稿で触れた様に、農民に手付金を与える際に、商人は地主に対して、その

農民の地代の支払保証をして、地主のもつ穀物に対する第一抵当権を解除して貰わねばならなかった。R県では、D県ほど米に対する前渡金制が普及しておらず、小仲買商は村の週市で米を現金で買付けた。貧しい小仲買商の中には荷牛を持たず、天秤棒を担いで農家を一軒一軒回り、少量を買付け、センターに運び売る者もいた。この様な者は行商人 (Pheriwala) と呼ばれた。

次に、各村市場において、住民に小売りすることを生業とする人々に目を転じねばならない。ブキャナンは、D県の報告書中で、この様な小売商に関する詳しい記述を与えている。そこでは、小売商は、商店主 (Dokandhu) と職人兼小売業者 (Byaloshadar) 但し、この用語の使い方は不適切である) に分けられ、夫々、一七種ずつが挙げられている。残念乍ら、それらを紹介する紙幅はないので表7に概括しておく。

(3) 流通圏と運輸手段

北部三県は東から西へ隣り合って並んでいるが、そこを通る河川路によりそれぞれの属す流通圏は少しづつ相違している。

表7 R 県、D 県の市場地にみられる諸小売店、小売商 (34 種)

店 名	資 金	主 要 扱 い 商 品 そ の 他
1. Andrawala	Rs. 500	米、豆、塩、油、砂糖、精糖、米加工品、パン、香油、香料、タバコ、ペナルの炭(押し、小売り)
2. Mudi	Rs. 40	米の小売
3. Chauhan Phorya	Rs. 20	同 上
4. Lobaner Phorya	Rs. 10	米の小売
5. Dosari (Gondabanik)	Rs. 100	香料、ウツク糖、各種染料、肥料、薬品、ペナルの炭、砂糖、紙、パン、の小売り
6. Jhalwala	Rs. 2-3	生皮、うこん、玉ねぎ、こんにゃく、唐辛子、の小売り
7. Gutwala	Rs. 10-12	精糖の小売り
8. Pan-Supariwala	Rs. 3-4	ペナルの炭と炭の小売り
9. Ganjwala	Rt. 50-60	吸引用ウツクの子の小売り
10. Kosyi	Rs. 10	羊肉の小売り
11. Katra	Rs. 25	本製家具を仕入れ小売りする
12. Basonwala	Rs. 200-1,000	良種の容器売り
13. Monihari	Rs. 10-50	ビーフ、珊瑚、ルビー、真珠、眼鏡、食器、絹糸、柄、ヨーロッパ製刀物などの小売り
14. Sangkhwala	Rs. 100-2,000	鳥、鹿鹿の小売り
15. Tulawala	Rs. 20-100	練粉の小売り
16. Sutili, Chotiawala	Rs. 5-50	ジューツの袋他、擦り糸の小売
17. Kaporya	Rs. 50-1,000	布地小売り
18. Laberi, Luri	Rs. 4-5	女性用装身具 (shell-lac) を作り、小売りする
19. Sangkhar	Rs. 50	製皮、サフラン、靴、靴を作り小売りする
20. Chamar	Rs. 10	刻みタバコ作り小売りする
21. Tamakwala	Rs. 4-5	蒸留酒の生産、販売小売り
22. Modwala	Rs. 25	パン、油、モーダルト、パン、パン、濃縮ミルク (Khair), カーフ (Chhena), の製造小売り
23. Goyala	Rs. 15-20	ミルクで作った菓子を生産と小売り
24. Moyra	Rs. 15-20	小豆を入れた菓子の生産と小売り
25. Haliylik	Rs. 1-20	各種野菜の栽培代付
26. Norobhawala	?	米、豆の粉と、甘味料で菓子を作り売る。
27. Pura, Phulariwala	?	米菓 (Muri, Khoyi), 豆菓子 (moolbhajia, chonabhajia) 胡麻菓子 (tila-bhaja) などを作り、小売りする
28. Bhuvari	Rs. 7-8	互の粉物を行う。
29. Dallhari	?	ろくろで木材を加工し、皿、鉢、ケセル、ペップの足、器などを作り小売りする
30. Kungkor	?	陶工であり、各種器、食器を作り、小売りする
31. Kumar	Rs. 4-5	石工
23. Stone cutter	?	鍛細工師、自分で製品を作り、小売りする。鋼、真鍮、銅、錫なども使用する
33. Kangarsi	Rs. 50-100	ケセルの一部を、ある合金 (Bidri) で作り売る
34. Bidriwala	?	

東のR県は、ジャムナーブラフマプトラ河の流系によつてシラジ港^{ガンジ}ナラヤン港^{ガンジ}とダッカとの結び付きが強く、ダッカ流通圏(東ベンガル流通圏といつてもよい)に属すが、中央のD県と西のP県は、ガンジス河の流系により、ムルシダバードとカルカッタのカルカッタ流通圏(西ベンガル流通圏といつてもよい)と強く結合している。又、P県は、同時に、パトナ流通圏の一部をもなしている。勿論、実際には単に流系だけでなくその他の経済的諸因も作用しておりD県にもダッカ圏から米商人が買付けに行くし、R県はタバコ、洋式藍、砂糖によってカルカッタと深い関係をもつ。R県は、又、北方のブータン、アッサム、ガロを商圏として持ち、実綿、ウール、木材、酒、その他により国境を越えた物資流通が行われている。P県も同様に北方のグルカ領と、木材、牧畜などで、強い結び付きをもつ。更に、これら三県の綿業にとって、西部インドから大量に輸入される安価な線綿は不可欠の原料となっており、この線綿のベンガルにおける集積地であるムルシダバード近郊のボゴバンゴラ(Bogobangola)と密接な関係を保っていた。もう一つの重要な物資である塩は、東ベンガル流通圏はチッタゴ

ンの塩と、西ベンガル流通圏はヒジュリなど南西海岸地方の製塩地帯と結びついていた様である。

こうして、一九世紀初頭の北ベンガルは、河川流通網により相互に結合しており、そのルート、運賃等についてもブキャナン報告は貴重な情報を与えてくれるが、もはや、それらを検討する余裕はない。しかし、一つだけ指摘しておきたいのは、河川交通を担った船頭たちが、ナイヤなどと呼ばれる漁師カーストに属し、その長(Ghatmajhi, Mandai)の強い統制下にあったことである。自船をもたない商人は、備船にあたって必ずこの長を通して交渉せねばならず、船頭たちはこの団結により、船の賃料を望ましい水準に保ち、集団の利益を守っていた。

(1) Charles E. Trevelyan, *Report upon the Inland Customs and Town Duties of the Bengal Presidency*, Calcutta, 1835, reprint (1976), p. 91.

(2) 谷口晋吉「在米糖業」二二五頁。同、「一八五九年ベンガル地代法の一考察」『橋論叢』八五ノ二、一九八一年、一九八頁。

四 非農業生産諸部門

本節では、農業以外の生産諸部門に焦点をあてる。ブキャナンはこうした職業として、R県について六三種を挙げたが、以下においてその内の重要と思われる職種をみてゆく。これら諸部門の全体像は既に表1に与えられているが、ここでは、各種の職種をサービス業、家内手工業、工場制手工業にごく大まかに分けて叙述する。各職業の就業者数は、表1を見られたい。

(1) サービス業

ブキャナンが芸能とした四種(表1中の Nos. 1, 2, 3, 4)もサービス業といえるが、ここではとりあげない。サービス業に該当するのは、洗濯人 (No. 5)、床屋 (No. 6) である。掃除人や奉公人も当然にいた筈だが、ブキャナンの調査では独立した職種として扱われていない。洗濯人 (No. 5, Dhoba) 一般住民は自分で洗濯をすませるから、顧客は富裕層である。出来高払いであり、夫婦で働き月収四ルピーほどの平均的收入を得る。彼等はヒンドゥー身分秩序の中では最下層 (Antyoi) に属す。

床屋 (No. 7, Kapiti) 広い顧客を持ち、「浄」とみなされる「九種職人」(Novasakti) に属す。各市場に店を開き、散髪、髭剃り、爪切りをし、一回一〇ガンダ (五アナ) 又はそれ相当の米を得る。農民、労働者は月に一度位サービスを受ける。ただし、R県では「不浄」カーストへのサービスは拒否する。しかし、D、P両県ではこの様な差別は行わない。床屋は、ヒンドゥー儀礼上の重要な役割を与えられており、花婿や出産一〇日後の母子にサービスをし祝儀を得る。R県南東部では、この職は世襲で、農民はサービスに対し収穫時に生産物の一定割合を払う。又、P県でも、農民は一定量の穀物支払いの契約をし、その都度毎の支払いはしないという。R県のこの記述は、ワタンのシステムが部分的にはあれ北ベンガルにも存在したことを示すもので注目されるが、しかし、これは、現在の我々のもつ情報による限りは例外的事例と考えるべきであろう。

(2) 家内手工業

ブキャナンの挙げる六三職種の内、家内手工業又はそれに準じるものは、少くとも五〇種を数える。それらに

共通する特徴は、家族労働力のみで行う零細な仕事であることといつてよく、又、生産物の販売先は殆ど域内市場である。

仕立屋 (No. 9) 伝統的なヒンドゥの衣服は、男女共に織り上ったままの布を身にまとうというもので、裁縫を必要としない。従つて、仕立屋は専らムスリム衣裳を作る。とはいへ、ヒンドゥであつても、役所勤務やヨーロッパ人と接触するものはムスリム風の盛装をする。だが、他方で、人口の圧倒的部分を占めるムスリム下層民は、一八七〇年代の調査においても七五%が「仮住いムスリム」(Basharoyee) と呼ばれヒンドゥの慣習や儀式を維持している⁽³⁾とある様に、衣服を含め日常生活はヒンドゥと交わる所がなかったのであり、仕立屋とは無縁であつた。従つて、殆ど全ての仕立屋はムスリムであり、限られた顧客を相手に注文生産を行った。当然に支払いは出来高により、少くとも四ルビー以上の月収を得た。日給で賃仕事をする者もあり、その場合は一日二アナ(月収にすれば三ルビー—二アナ)が標準であつた。

貝製腕輪職人 (No. 13, Shankari) 貝の腕輪は、ベンガリー・ヒンドゥの既婚女性の象徴であり、その職人

は「九種職人」の一員とされる。原料貝は、クマルカリ (Kumarhari, ラージシャヒー県) のある商人が、カルカッタから一手に仕入れ、それを北ベンガル各地の職人に供給している。この貝を環状に切断し研磨するのはかなりの技術を要する。その上に、貝の仕入費、染料代などが必要であり、独立自営の職人として營業するには五〇ルビーもの元手がかかる。この様な職人は、安定した需要を背景に、見込み生産を行い、自分の店や市場で小売りしたり、商人に卸す。一組の腕輪は一七ルビーもする高価なものであり、この様な職人は良い収入を得るとされる。又、中には、四〇五百ルビーの資金を持ち、大量に貝を仕入れ、職人を備つて出来高払いで仕事をさせる者もいる。この場合には、家内手工業の域を出ている。逆に貧しい職人には、環状に切断し研磨済みの貝の輪を仕入れて、彩色のみを施して売り僅かな手間賃を稼ぐ者もいる。巨大なヒンドゥ領主が君臨したD県には、腕の良い独立した職人が多いが、カムルビー文化のより根強いR県や、北インド文化圏に半ば入り込んでいるP県では、貝の腕輪への需要も小さく、貧しく未熟な職人が多い。又、これら両県では、本来のシャンカリ

1・カーست以外の者も数多くこの職業に従っている。麻マット織工 (No. 16) 麻マットは着座、睡眠用に広く使用されている。多くの農民は自家用にマットを自作するが、中にはこれを職業とする者もいる。しかし、これに対する需要は通年はなく、又、仕事のある月でも月収は二ルピーほどにしかならず、これだけで生計をたてるのは困難である。従って、彼等は、農地を保有し、他の家族員または折半小作人に耕作させ、麻マット織りの仕事のない時には、自から農耕をし、生計を補った。特定カーストのみがこれを行うという記述はない。

バスケット職人 (No. 18. Dom Paton) 日常生活に不可欠の種々の製品(食糧保存籠、運搬用籠、食器、鞆、魚の罟、鳥籠、箒、竹マット、座椅子、衝立、その他)を、藤、葦、竹などを編んで作る。多くの農民は、これらの道具を自給するが、決して市販しない。というのは、これを職業とするドム・バトニが豚を食べ、飲酒し、ヒンドゥの価値基準にあつては最も「不浄」とされているので、これらを市販することは自分も彼等の同類であると認めることになり、誰もが忌避するからである。この如何にもインド的理由で、バトニはその販売市場を独占

している。数多くの製品の中で最も商品として重要なものは竹マット (Chatayi) である。これは住居の天井板となったり、小屋の側壁、家の囲い塀、船の天蓋などに使用される。大きな判は百枚四ルピー、小判は百枚二ルピーで大量に売られる。D県の竹マットは良質なので、時に、商人が前渡金を与えて大量に買付ける。用途がかくも広く有用性も高い商品群を作るが、彼等の収入は、夫婦共働きでも月収二〜三ルピーで、大変に貧しい。次の週市までの原料を仕入れるのに二〜三アナを確保することがやっとという有様である。

皮革職人 (No. 20 & 21. Munchi, Chamari, Kurrai, Bode) 有用性の非常に高い素材である皮革を扱うが、動物の死体処理を伴うので最も「不浄」な職業の一つとされている。クライルは、バター、油、糖蜜、マスタード油などの保存用革袋 (Mupo) を水牛皮で作る。ペデは、楽師でもありドラムの皮を張る。どちらも限定された製品を作り、職人数も少い。ムチ、チャマルは牛や羊の生皮を処理し、それを用いて各種製品(靴、サドル、鞆など)を作る。生皮を鞣し、染色するまでは女の仕事を、それを用いて製品を製造するのが男の仕事とされて

いる。牛の生皮は一枚1-6ルビーで、処理後は1-4ルビーになる。羊の生皮は一枚1-20ルビーで、処理後は1-6と1-4ルビーになる。夫婦で一カ月に八足の靴を作り、三ルビーほどの収入を得る。バスケット職人と同じく、その「不浄性」の故に、他カーストが参入することはない。

煙草職人 (No. 26) R県はタバコの主産地として一九世紀後半にはベンガルで頭抜けた存在になるが、この時期には、特に目立つほどの重要性はまだ有していなかったようである。多様なカーストの者が四と五ルビーの零細な資本でタバコ葉と糖蜜を仕入れ、加工して自宅や市場で売る。収入は職人としては貧しい方に属す。

製油業者 (No. 28, Kalu, Tel) マスタード油はベンガル料理に不可欠であり、織物業に次ぐ多数の職人が製油業に従事している。これは「浄」なる仕事であり、テリは真正スードラ (Sat Sudra) の筆頭に位置する。

とはいえ、実際の製油業者の九割以上は、ラージバンシ、ムスリムなど本来のカースト以外の者が行うようである。例えば、R県には三、二五四の製油業者がいるが、他方で、本来のこのカースト (テリとカル) の家族

数は僅か二百である。搾油場は簡素な小屋とそこに設置された木臼 (Mole) からなる。一日二回操業するには交代用を含め二頭の役牛が必要であり、その為の種子も買い溜めておかねばならない。油に対する需要は恒常的にあるから通年営業をできる。ところで、実際の油搾り職人には、様々なタイプがあり単純な一般化はできない。

(i) ある者は豊富な資金を持ち、マスタード栽培農民に前渡金を与えて原料を確保したり、二と五基の木臼をもつ。複数の臼を持つ者は、当然に労働者をやとって生産を行ったと思われる。(ii) 他の者は、資本に乏しく、次の週市までの種子を辛じて仕入れて搾油し、その売却代金でその次の週の生産を継続する。なかには、役牛を二頭しかもたず、一日一回しか繰業できない者もいる。(iii) 更に別の者は、自分で種子を買えず、農民から種子を受け取って搾油し、手間賃として一定量の油と豆粕の全てを得る。この中には、役牛をもたず、人力で臼を回す者さえある。(iv) 更に他の者は、搾油施設を所有するが自分ではそれを動かさず、希望する農民に施設を貸し、一定の料金を得る。(v) 又、R県北東のブラフマプトラ河岸のナゲシヨリ (Nageswari) には七

百家族もの貧しい製油業者が集中するが、彼等の多くは油商人の影響下にある。彼等は、商人から種子を受け取り、搾った油は全て商人に渡し、その代償に質料と油粕を得た。

この様に多様な経営形態をとる製油業者たちは、どの位の収入を得たのだろうか。地域により、又、恐らくは品質により、種子と油の値段が異なるし、事例毎に一日の種子の処理量もまちまちであるので比較が難しいのであるが、ごく大雑把にいうならば、自分で種子を買い油を売る者は、一日三アナ内外（月収五ルビー一〇アナ）を得る。他人の種子を製油し質料を受け取る場合は、その報酬は一日当り一・四アナから二・五アナまで多様であるが、一日の種子の処理量を二四シェール（〇・六マシ）として計算し直すと、一般農民から種子を受け取る場合は月収四ルビー内外であり、商人の支配下におかれた場合は月収三ルビーほどとなる。

大工 (No. 33. Chhutar, Shradhor, Barai) ベンガル農業社会に不可欠の存在だが、カースト・ランクでは、「不浄であるが完全に墮落してはいない」とされる下層カースト群 (Nish) に属す。しかし、実際の大工の大半

は、ラージバンシという北ベンガル特有の部族の人々である。大多数は村に住み、粗末な農具、家具を作る貧しい職人であるが、都市では需要も多く収入も月収四〜八ルビーと高水準である。注文があれば、搾油用木臼、搾糖用木臼、足踏み米搗き器 (Dhenki) なども製作する。なお、若干の者は船大工として良い収入を得るが、それについては後述する。

陶工 (No. 37. Kumar) 北ベンガルの職人群の不可欠の一員で「九種職人」に位置付けられている。その製品は赤陶と黒陶がある。黒陶の方が堅牢で価格も1/8ほど高いが、生産の大部分は赤陶である。どちらも釉を欠くので表面が粗く、汚れやすい。この為に「浄」カーストの者は一度用いた陶器の食器は使い捨てにする。かくして陶器の価格は非常に安価に抑えられるので、陶工はよりよい品質を求める誘因を欠くという。原料の陶土は、陶工以外の者がよい土を見つけて運んで来、陶工は彼等に賃金を払う。更に、彼は、陶土使用の代償として、地主に製品の一部を献上する。窯出し後の製品は小商人が即金で買い取り、市場で売る。ある陶工は男四名女二名で仕事し、一カ月に五回窯出した。製品は各回四ル

ビー、コストは燃料一ルビー、陶土一〇アナであるから、一ヶ月の純収入は一ルビー一四アナである。夫婦で四ルビーほどの収入になるので、職人としては平均的な収入といつてよい。

鍛冶屋 (No. 49, Kanar) これも、本来は「九種職

人」の職掌であるが、実際にはムスリムも含めてあらゆる人々が参入している。通常、彼等は地鉄を買って様々な製品（農具、家庭用品）に仕上げ、市場で小売りするので、かなりの元手を必要とする。又、注文があれば、釘、かすがい、大工道具、刀剣などを作り、更には製糖用大鍋まで製造する。この鍋は小さいものでも六軽量マシ（一六七kg.）もの重量があり、製作には六人で一ヶ月（三人で二カ月）を必要とする。原料用の一二マンのピルブーム (Birhum) 産鉄（三六〜三九ルビー）は注文主が与えねばならない。こうしてできる大鍋は六〇〜六三ルビーの価格になる。鍛冶屋は、通常、親方（小ハンマーと火ばさみを使う）、職人（大ハンマー）、下働き（ふいご）の三人でチームを組み、賃備いされる場合には、親方は一日八アナ、職人五アナ、下働き三アナを得る。ブキャナンは書き落しているが、村の鍛冶屋の仕事

の大きな部分は、農具、牛車の金具部分などの修繕にあつたと考えられる⁽⁴⁾。

織物業 (Nos. 51〜51.) もはや紙幅がないので、詳しくは別稿で扱いたい。表1の五一〜六一にその概容が与られていることを指摘するに留める。

(3) 工場制手工業

この項に正しく該当するのは、製糖業と洋式藍業の二つである。しかしこれらについては前述のように既に小論文を書いているので本稿では省略する。以下では家内手工業と工場制手工業の中間に位置するいくつかの職業について、述べておく。装置がやや大掛かりなことと、外部労働力が不可欠の要素となつていることなどが、その特徴である。

酒造業者 (No. 27) 飲酒は卑しい行為とみなされており、「不浄」な下層民のみが公然と嗜む。製造者は一般にモドワラ (Modwala) と呼ばれるが、これはカースト名ではない。下層カーストの者がこれに従事するが、かなりの元手を要するので、業者はごく少数である。醸造所は、土器の鍋、冷却器、炉と、原料米、発酵剤

表8 造船費用

(a) 375 マン級商船 (Ulak) の建造費		(b) 100 マン級カヌー船 (Jong) の建造費	
木材 (Sal 樹, 肋材用, 3対)	Rs. 36	木材 (4対)	Rs. 12
木材 (Sal 樹, 帆柱用)	12	製材費	4.5
製材費 (肋材)	9	釘類	8
製材費 (帆柱)	4	鍛冶屋支払い	4
竹	400本	船大工への支払い (1名, 2ヵ月)	8
ジュート	7.5マン	労働者への支払い (2名, 2ヵ月)	8
ジュートの一組 (Son)	4束	縄, 竹, その他	2.5
竹マット	100枚	大工らへの食糧と贈与	3.5
釘, かすがい	13 4/3 マン		
食糧 2大工頭	3ヵ月		
3下働き	3ヵ月		
船大工への支払い	42		
進水式費用	3		
進水祝儀	2		
間隙充填 (caulking)	1.5		
帆布 その他	5		
Gab fruits (〒) 1000個	1		
	Rs. 200		Rs. 50..5

(資料) 表8 (a)に同じ。

(資料) Buchanan, *Ronggpur*, Book V, pp. 32-34.

(註) 1マン=40 シュール
1マンの重量は、商品により、又、地方により実に多様だが、ここでは標準マンを示せば、1マン=37.3キログラム。

(Bakhor。各種薬草などを調合したもの)そして、少くとも二名の男子労働力からなる。一回の醸造に一〇日間ほどかかり、原料米の半分の重量の三級酒が得られる。コスト、収益に關しては、データ間に不整合が大きいので、ここでは取り上げられない。なお、アッサム、ブータン方面から大量の油が、域内の1/4の安値で流入するので、消費量は域内生産をはるかに上回ると思われる。

船大工 前述の大工の一部が造船をも行う。造船の盛んなのはR県、ドルラ河 (the Dhorla)、ティスタ河 (the Tista) 沿岸で、米換算で積荷重量が二〜五百マン級の商船が主力をなすが、一、二〇〇マン級まで建造可能である。全て受注生産であり、建造主 (商人) が、木材 (Sal)、釘、その他一切の材料を供給し、一組の船大工 (棟梁一〜二名、中級大工及び下働き各数名) を備って建造にあたらせる。通常の商船 (Ulak) 一隻を進水させるまでに二〜三ヵ月を要し、その間の食費も建造主が与える。

表8 (a)、8 (b)に、商船とカヌー船 (Jong) 建設のコスト明細が示されている。大工の月収は、棟梁七ルピー〜下働き三ルピー。ここで注目してよいのは、造船用の釘、かすがい、材木などは、必要に応じて特注するので、一

表9 製紙業者の月間コスト

足踏破砕器 (Dhenki)	10 ルピー	
水槽		8~10 アナ
	10 ルピー	8~10 アナ ⁽¹⁾
原料ジュート	1 ルピー	
石灰		7 アナ
米 (糊用)		4 アナ
労賃 (延べ12名. @2アナ)	1 ルピー	8 アナ
竹のフレーム		4 アナ
	3 ルピー	6 アナ
製品 100 しめの紙 (三級品)	8 ルピー	8 アナ
家族の利益	5 ルピー	2 アナ

(資料) Buchanan, *Ronggopur*, Book V. p.21.

(註1) これらは、少くとも一生使える。

隻の船の建造にあたっては、船大工以外にもかなりの雇
用波及効果を持つことである。R 県では、通常の商船が
年六〇隻ほど進水する。安価なカヌー船はより多く建造
されていることであろう。

煉瓦製造業 (No. 39) 館や寺院などを新築する地主
などが、その都度、煉瓦製造業者と契約し、前渡金 (三
〇ルピー) を渡して製造させる。後者は、この前金で二

〇名近くの労働
者を備い、四週
間ほどかけて一
〇万個の煉瓦の
原型を作り、そ
れを燃料と交互
に積み上げて窯
となし、二週間
近くかけて、こ
れを焼成する。
燃料は発注者が
供給する。受注
者は製品を発注

者の指定する場所に届けて、残金 (四〇ルピー) を受け
取り契約が完了する。この作業は野天で行われるので、
乾期にのみなされる。受注者は、自分も監督労働をし通
常の労賃を受けとる上に、受注者の報酬として一〇ルビ
ーほどを得る。

製紙業者 (No. 19) これも R 県で最も盛んで、同県
産紙は、ダッカ方面に輸出されている。業者は、全員ム
スリムである。原料にはジュート (Peta) を使い、こ
れに石灰 (Chunan) を加えて破碎しバルブ化し、それ
を漉して紙が出来る。原料をバルブ化するまでを妻が行
い、紙漉きを夫が行う。しかし、ジュートの茎を破碎す
る作業は大変な重労働なので、この部分は、通常は外部
から労働者を備って行わせる。このように、この産業は
家族労働を基軸としながらも、それにかんがりの賃労働を
結合させて、行われる。製品は、二四枚を一しめ (quire)
とし、一級、三級品に分かれ、値段も、一ルピーに付き
二一三しめと大きな差がある。製造業者は製品を小売
業者に卸し、後者がそれを市場で捌く。近年、紙に対す
る需要が伸びており、ある商人は製品を確保する為に、
一千ルピーもの前渡金を与えたという。業者のコスト・

収益は、表9に与えられている。夫婦で働いて、月収五
ルピー二アナと高収入の部類に入る。

(1) この時期の北ベンガルのカースト構成については、別
稿を予定している。ヒンドゥの労働階級は、Novasakh—
Sat Sudra—Nikh—Antyojの四層に分かれ、上位二つが
「浄」、下位二つは「不浄」とされている。

(2) 深沢宏『インド社会経済史研究』一九七二年、第九論
文など。

(3) Baboo Gopal Chunder Dass, *Report on the Statistics
of Rungpore for the year 1872—73*, Calcutta, 1874, p.
74.

(4) 筆者の一九八三と六年にかけてのラングアル県のある
村落における合計一〇カ月間の住み込み調査中の見聞によ
る。

五 結言に代えて

もはや許された紙幅を大きく超過しているので、本文
の内容を要約することはしない。本稿の作業を通じて、
一九世紀初頭北ベンガルの非農業部門の姿がある程度浮
び上がってきた。これに、紙幅がなく省略せざるをえな
かった織物業に関する考察を重ね合わせ、更に、当時の
農業生産の具体的様相を農家経営のレベルでとらえる努
力を行うことにより、北ベンガル農業社会の社会経済的
全体像をより鮮明にさせてゆく作業を、なるべく早い機
会に果したいと思う。このことを記して、結言に代え、
この拙い論文の筆を擱くこととする。

(一橋大学助教授)